Vol.2015-ICS-180 No.5
2015/7/16

発言同士の関係を曖昧にする発言提示方法の提案

市川嘉裕[†1]　綾屋紗月[†2]　熊谷晋一郎[†2]　田中文英[†1]

個人の感覚に依存する悩みや苦労は多種多様であるため，外側からの支援や対策を打ち出すためには当人からの一次的な情報を集める必要がある．本研究では，そのような情報を収集するための場を提供するオンラインシステムとして，言いっぱなし聞きっぱなしの原則（テーマについて一方的に発言するミーティングの方式）を取り入れた SNS を提案し，その評価を行った．具体的には，従来の掲示板等のシステムでは自然に発生する文脈を希薄にするため，発言同士の関係を時間的・空間的な観点から曖昧にする発言提示方法を実装したプロトタイプシステムを構築し，感覚過敏を自覚する方々を対象に参加者を集めて議論を行い，ログとアンケートを収集し分析を行った．その結果，(1)システムがより多くの情報を引き出すこと，(2)本システムのニーズの高さ，(3)いくつかの改善点を明らかにした．

1. はじめに

悩みや苦労を抱える人々のコミュニティの例として成人の発達障がい者で構成される Necco 当事者研究会[*a] [1][2]がある．Necco 当事者研究会では，他人とどこか異なる参加者が自身の心や身体について他の参加者と語り合うことによって自己を見つけるといった活動が行われている．ここでは，参加者間の強すぎる関係性による論争の発生を防ぐため,「言いっぱなし聞きっぱなし」と呼ばれるルールが採用されている．このルールの下では他の参加者の語りに対して批判したり，アドバイスしたりすることを禁止として，テーマについて一方的に発言する形式でミーティングが行われる．このように，苦労について一人だけで考えるのではなく同じような問題を抱える他人と程よい距離感を保つことによって誰もが自分の言葉で発言できるための場の確保がなされている．このようなミーティングを含めた活動は当事者研究と呼ばれ，従来の治療とは異なるプロセスで当事者に回復（リカバリー）をもたらす効果が期待されている [3].

そこで，言いっぱなし聞きっぱなしのルールをオンライン上で適用可能にし，苦悩を抱えた人々の語りの場を構築できれば，(1) 開催条件（場所，時間，対面性等）の変化によって参加者の裾野が広がってより多くの当事者が参入できるようになること，(2) 参加者の語りのデータの増加によって外部からの支援や対策を打ち出しやすくなる環境の整備につながることが期待される．そのためには言いっぱなし聞きっぱなしを行いやすいように配慮されたシステムが必要である．しかしながら，既存システムの「コミュニケーションのための」機能や規則，制約は当然のことながらコミュニケーションをリッチにするが，その一方で発言を躊躇させてしまう向きにも作用する．例えば，ユーザ名や ID は発言者に対して言及できる，返信機能は発言に対して明示的に言及できる，発言の時間的・空間的に整然とした提示は話題の流れやまとまりを作るように働く一方で，それらは相手の立場を気にしたり，場の空気を読む必要が出てきたり，人同士の距離が縮まりすぎたりするために，言いっぱなし聞きっぱなしに向かない環境をつくる原因となる．

本研究では，オンラインで同期的に文字による発言を交わせる環境を想定した上で，発言同士の関係を時間的・空間的な観点から曖昧にする発言提示方法を提案する．これは，既存のコミュニケーションのためのシステムが作る人や発言同士の関係性をなくすべき文脈であると捉え，文脈の生成を必要最小限に抑えることで「言いっぱなし聞きっぱなし」に特化したシステムが構築できるのではないかという考えに基づくものである．

本稿では，そうしたシステムを言いっぱなし聞きっぱなし SNS（Social Networking Service）と呼び，その構築に向けて，文脈を希薄にする発言提示方法を実装したプロトタイプシステムを感覚過敏を自覚する被験者に試用してもらった実験とその結果を報告する．

論文の構成は下記の通りである．第 2 章では当事者研究について紹介し，第 3 章では提案システムにおける文脈の希薄化とその実装について記述し，第 4 章では試用実験の内容について，第 5 章では実験結果を述べ，最後に第 6 章にて本研究をまとめる．

2. 当事者研究

当事者研究会は精神障がいをもつ当事者が自身の抱える問題に向き合うために北海道の浦河で始まったと言われている [4]．特徴的なのは研究というスタンスをとることである．当事者研究の上では，当事者は治療されるべきものであるというような規定を受けず，自らの内側を語ることを容認されることで，新しい発見を見出す可能性がある．この実践は全国的に波及しており，試行錯誤が繰り返されながら様々形式で実施されている [1][5]．当事者という言葉を拡大すると，人は何かしらの問題を抱えているものであり，何かしらの当事者であることから，誰でも当事者研

†1 筑波大学
University of Tsukuba
†2 東京大学
The University of Tokyo

*a) 発達障がい者の就労支援施設「Alternative Space Necco」で月 2 回行われているミーティング活動およびその団体を指す．

ⓒ2015 Information Processing Society of Japan

究を実践して恩恵を受けることが可能であるはずである．このような当事者は社会規模で見ればたいていの場合マイノリティであるため，当事者研究のような場が確保されることは重要である．また，そのような場で当事者の内側から語られたデータは社会的な問題を解決する上で重要な意味をもつ．例えば，対人関係や語学等について多くの悩みや苦労を抱える大学生等に対する語りの場が作られれば，そこで得られる一次的かつ具体的な事例から，大学等が問題を把握することや対応策を打ち出すことも可能となるであろう．

3. 言いっぱなし聞きっぱなし SNS

3.1 希薄化する文脈

通常の会話や一般的な知識情報の伝達では，他者によって意識的・無意識的に文脈が付加され情報整理が行われるが，悩みや苦労などは個人の主観的な感覚に依存し，やりとりされる事例は客観的に整理され得ないものばかりあるため，他者によって付加された文脈はむしろ邪魔になる場合がある．言いっぱなし聞きっはなし SNS ではそのような邪魔になる可能性のある文脈を極力排除することで，他者による情報整理をあえて避ける．具体的に，システムによって明確に排除しようとする文脈として（1）発言者，(2) 発言先，(3) 発言順序を挙げる．図 1 は上記の三つの文脈によって情報整理されている状態（左）から，文脈を排除した状態（右）へのイメージである．文脈を排された発言はそれ単体でしか意味をなさないように存在するだけとなる．次にそれぞれの文脈が発言へ与える影響を述べる．

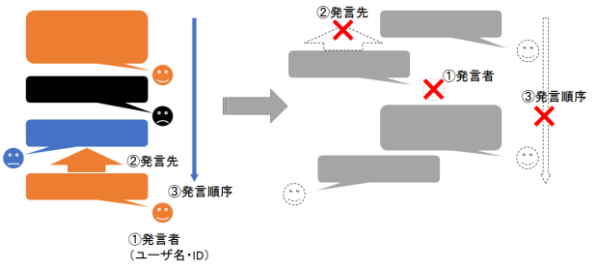

図 1 文脈の希薄化のイメージ
Figure 1 Picture of weakening contexts.

3.1.1 発言者

ある発言が誰によるものかという発言者の情報は文脈となる．発言者情報は発言の信頼性・信憑性やパーソナリティの類似度による有用性の増減に寄与し，閲覧者はそれによってフィルターをかけながら発言を解釈する．信頼できる発言者や確固たる情報が存在する領域においては，情報の信頼性や信憑性は重要である．しかしながら，当事者研究が必要とされる領域においては，発言者情報によってフィルターがかけられることは，偏った見方を助長するだけでなく，信頼性・信憑性の低い噂レベルの情報も，新しい発想を見つけるための材料になる．

3.1.2 発言先

ある発言が誰のどの発言に対するものかという発言先の情報は文脈となる．発言先情報は発言を引き出した発言や発言群を指示することで発言が様々な背景情報と共に整理される．確固たる情報が存在する領域においては，質問とそれに対する回答やその捕捉というように結びつきが整理され役立つ知識として蓄積される．しかしながら，当事者研究が必要とされる領域においては，発言先情報によって整理されることは，間違った情報の蓄積につながるだけでなく，質問への回答にあたる情報の提示は多くのケースで容易ではないため，このような形式の知識の蓄積を期待することは適切ではない．

3.1.3 発言順序

ある発言が他の発言とどういう順序関係にあるかという発言順序の情報は文脈となる．発言順序情報の例として，発言を発言時間の順に提示することは，発言先が明示されない場合でも，発言者は発言順序という背景（前提）を利用して発言することができ，閲覧者は発言順序をみて意図を汲み取りながら発言を解釈する．発言先情報と同様に，確固たる情報が存在する領域においては，質問とそれに対する回答やその捕捉というように結びつきが整理され役立つ知識として蓄積される．しかしながら，発言先情報と同様の欠点があるだけでなく，すでにある文脈に反する発言や関係の薄い発言をすることに対して心理的な抵抗を与え，結果として提供される情報量が減ってしまう．別の例として，新しい発言をするために過去のログをどこまで確認すればよいのか判断することは難しい．

3.2 文脈を希薄化することの意義

発言者や発言先，発言順序を排除することの意義は，立場や会話の流れに縛られないようにすることで発言しやすさを確保し，提供される情報量の減少と質の低下を防ぐことである．他人の意図した文脈が付加されない発言に対して，閲覧者は自ら発言を解釈しようと心がけることにつながり，発言者の立場になったとき自身の発言が単体で意味をなすように発信するように学習すると期待できる．また会話のような流れが生じにくくなることは，強いつながりの反対にある疎外感の発生を抑制し，発言の攻撃性を和らげるなど，言いっぱなし聞きっぱなしを実施しやすい空間の形成を助ける．

3.3 システム概要

言いっぱなし聞きっぱなし SNS では前述した三つの文脈を排除するようにシステムを構築する．具体的には発言者情報は発言に付随させない，発言先情報を希薄化するために発言同士の関係を明示せず空間的にもバラバラに提示し，実際の発言順序と発言の提示順を必ずしも一致させない方法をとる．

システムは図 2 に示すようにサーバとクライアントからなり，各種データベースはサーバサイドアプリケーショ

ⓒ2015 Information Processing Society of Japan

ン（以下，サーバアプリと記す）に接続される．システム利用者はクライアントアプリケーション（以下，クライアントアプリと記す）からシステムにアクセスし，サーバアプリはクライアントアプリの要求に応じてデータベースやクライアントとデータのやり取りを行う．サーバアプリは Node.js フレームワーク [6]で構築され，クライアントアプリは任意のブラウザ上で主に javascript によって動作する．システム利用者は任意のウェブブラウザをインターフェースとして発言の投稿と閲覧，発言に対する各種操作，クライアントの設定変更操作が行える．投稿はフォームに文章を入力し投稿ボタンを押すことで行い，投稿された発言はログインしているユーザ全てにほぼリアルタイムに提示される．発言表示エリアが一杯になったら先に表示された発言から順に自動で非表示にされる．ログインしていないときに投稿された発言は，ログインしたときに新しいものから順に発言表示エリアの空きスペースが一杯になるまで表示される．

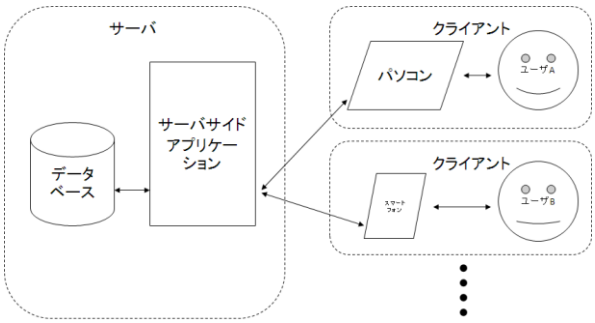

図 2 システムの構成
Figure 2 The structure of the proposed system.

3.3.1 発言者情報の排除

発言者の文脈を排除するため，サーバはクライアントへ発言データを送る際に発言者名や ID 等の情報を付加しない．システム利用者が他の利用者（2 人以上）が誰であるか知っているかどうかは関係なく，それぞれの発言が誰によるものか確定できる情報を与えないことがポイントである．必然的に発言同士が同一の発言者によるものかという情報も秘匿されることになる．

3.3.2 発言先情報の排除

発言先の文脈を排除するため，発言に対して明示的に言及する機能や他の利用者に宛てて発言する機能を設けない．加えて閲覧のためのクライアントアプリはサーバから受け取った発言情報を整然と表示するのではなく，表示領域内のランダムな位置に表示する．

3.3.3 発言順序の排除

発言順序を排除するため，クライアントから発言の提示のリクエストを受けたサーバは発言時間に関係ない順番で発言データをクライアントへ送信する．具体的には，投稿された発言は一旦ランダムな時間だけ遅らせてスタックへ格納し，時間経過によりクライアントへ送信する．つまり，発言したタイミングより少し（ランダムな時間だけ）遅れて他のクライアントに提示される．そのため，発言順序と表示の順番で必ずしも整合性がないことになり，発言順序が閲覧者に対して隠蔽される．このランダムの遅延時間は，発言毎だけでなく閲覧者毎に異なり，そのため発言および人によって発言の見える順番が異なる．遅延時間の参考として，本稿の実験においては 15 秒から 60 秒までの間でランダムとしている．

3.4 インターフェースとその他の機能および操作

言いっぱなし聞きっぱなし SNS のその他の機能として，ログイン，既読，キープ，削除，アーカイブ，リフレッシュ，リスト，個人設定などがある．これらは，テスト繰り返しながら試行錯誤的に必要と判断されたものである．各機能の実装の詳細な理由は省略するが，それぞれは基本機能を補助し，邪魔しないことを念頭に置いて組み込んだ．

システムにアクセスするインターフェース（ログイン後）は図 3 のようになっている．最上部は左から，ログイン名，投稿ボタン，リスト開閉ボタン，検索ボタン，リフレッシュボタン，ログアウトボタン，次の段はインフォメーションエリア，その下が発言表示エリア，右に開かれた状態のリストが示されている．発言表示エリアにはバラバラな位置に複数の発言が表示されている．

図 3 クライアントアプリのメイン画面の例
Figure 2 The screenshot of client’s display (main mode).

投稿ボタンを押すと発言を入力して投稿することができるフォームが現れる．利用者はこのボタンから発言を投稿し，発言表示エリアに順次出てくる発言を閲覧することが主な利用方法である．リスト開閉ボタンを押すと右側に出るリストの表示と非表示を切り替えることができる．リストではキープした発言，自分の発言，個人設定の 3 種類の一覧を確認，操作することができる．検索ボタンを押すとこれまでの発言から完全一致のワード検索を行えるフォームが現れる．リフレッシュボタンは既読をつけた発言をアーカイブし，発言スタックにある新しくかつ未読の発言を優先的に呼び出すことができ，表示エリアが満たされるまで発言が表示される．ログイン直後にも同じ挙動が自動的に起こり表示エリアが発言で満たされる．ログアウトボ

ⓒ2015 Information Processing Society of Japan

タンによりログアウトできる．

発言表示エリアに表示された発言はそれぞれに対して可能なアクションが設定されている．発言の右上にアーカイブボタン，中段の発言本文を挟んで下段にキープボタンと削除ボタンが配置されている．アーカイブボタンを押すと発言表示エリアから発言を一時的に非表示にすることができる．キープボタンを押すと発言の背景が黄色になると同時にキープした発言リストに一覧表示される．キープボタンをもう一度押すと解除される．それぞれの発言が全体で何回キープされているかの情報は，発言者本人のみ確認することができる．削除ボタンを押すとその発言を一切表示させなくすることができ，ワード検索の対象などから外される．基本的には削除操作の影響は自分にしかなく他人の嫌な発言を自分が見ないために消す用途に用いるが，例外的に発言者自身が発言を削除すると全体から削除される．ただし，発言者本人の削除によっても誰かがキープしていた発言リストから消されることはない．このように，キープボタンの基本的な用途は情報をメモすることである．発言表示エリアには参加者から新しい投稿があると自動的に表示され，表示エリアが一杯になると先に表示されていた発言から順に自動的にアーカイブされる．

個人設定のリストでは表示設定をカスタマイズすることができる．このように，ログイン機能を用いることで，個々の利用者対する様々な情報を保持させている．併せて，システム管理者は発言や操作の履歴を利用者ごとに区別して記録することができる．

4. 感覚過敏当事者イベント実験

4.1 実験目的

本実験は前述の言いっぱなし聞きっぱなし SNS を利用して，当事者研究会を実施してもらい，システムの（1）有用性を評価し，（2）改善点を調査することを目的とした．また実際に利用していただくことで，（3）ニーズや利用ケースを調査することも目的とした．

4.2 被験者

被験者は Web サイトおよび Necco 当事者研究会のメーリングリストによる告知*bに対する応募者により構成された．対象は「感覚過敏・鈍麻」を日常生活で感じている人で，医師の診断等は不問とした．参加には謝礼として時間給を支給した．告知の詳細については脚注に記す URL を参照されたい．実際に集まった人数は合計 27 名（当事者研究会 1 回目：8 名，2 回目：10 名，3 回目：9 名）であった．

4.3 実験方法

本実験では実験参加者（被験者：以後，参加者と記す）を一つの会議室に集め，指定したテーマについて当事者研究会のミーティングを実施し，その際，同時に言いっぱなし聞きっぱなし SNS を利用してもらう方法をとった．ここでの SNS の利用とは，発言の閲覧や投稿，各種操作，場合によっては SNS があることに伴う身体的・心理的な行動を含めたものを指す．

一回の当事者研究会は 10 人前後のグループで行い，それぞれの参加者は目の前にノートパソコンを置き SNS を利用する．SNS の閲覧，投稿，その他の行動は全て参加者の裁量に任せ，不要や不快と感じたときは利用停止することを許可しており，事前に同意書により同意を得ている．

4.3.1 当事者研究会の進行

本実験の当事者研究会は Necco 当事者研究会で実際に行われている方法を採用した．会は司会者の主導で進行する．まず，司会者は言いっぱなし聞きっぱなしのルールを説明し，その後，テーマミーティングに移る．具体的な進め方としては，司会者がテーマを提示し，まず司会者自身がそれに回答した後，他の参加者に順番に発言権が回され一回ずつ回答する．回答の持ち時間は 1 分や 3 分など，テーマごとに適宜指定されるが，実際にはそれよりも短くなってもいいし，パスをすることも自由である．この間，全体を通して言いっぱなし聞きっぱなしのルールに則り進められる．言いっぱなし聞きっぱなしのルールは大きく分けて以下の三つを守ることである：

- お互いに会話することや，アドバイスの提供は避けて，テーマについて一方的に発言すること
- 発言するときは文章のまとまりなどは気にせず，自分の体験や感覚を言葉にすることに集中すること
- 発言を聞くときは相槌を打ったり，目を見て話したりするなど一般的なマナーは気にせず，相手の発言の内容をイメージすることに集中すること

本実験ではメインテーマを「感覚過敏・鈍麻を感じないのはどんな時？／どんな感じ？」とし感覚過敏・鈍麻の当事者から各々の体験や考えていることを話していただいた．実際には，（1）テーマ「今の体調や気分はどうですか？」（一人 1 分程度）に続き，（2）メインテーマ（一人 3 分程度），それに加えて，（3）テーマ「感覚過敏・鈍麻に対して何か行っていることはありますか？」というテーマ順で進行した．

4.3.2 アンケート調査

実験後に参加者の主観的な評価を得る目的で，（1）自分のことについて，（2）SNS の使い心地について，（3）自分への影響について，（4）全体的な効果について，（5）本 SNS への関心について，それぞれ数値で答える設問と自由記述の設問を設けたアンケート調査を実施した．

*b) 「当事者研究×情報工学コラボレーション企画 発達障害者の支援技術開発」と称して広く告知が行われた（参考：http://necco-tk.com/info_touken_collabo_jikken_kokuchi/）．

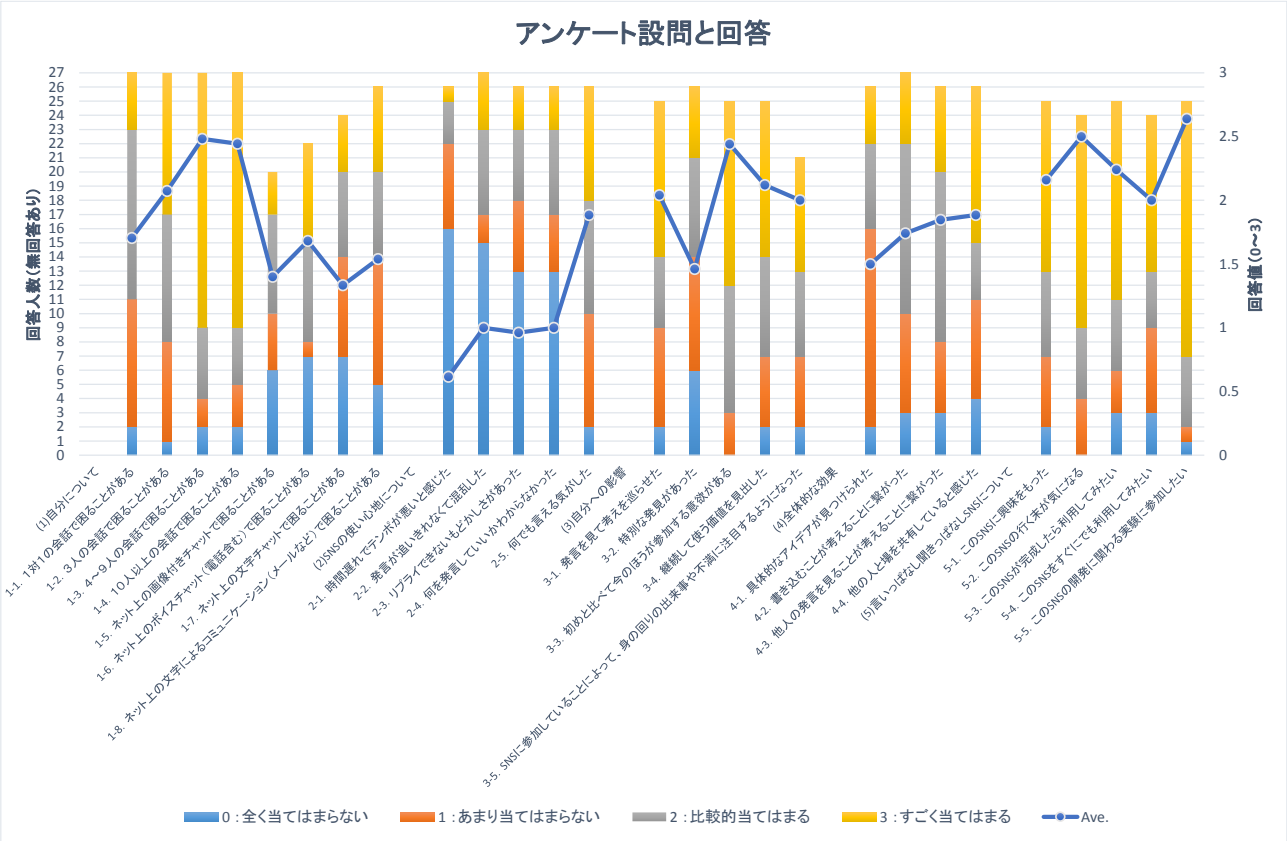

図 4 アンケートの質問と回答結果（自由記述を除く）

Figure 4 The questions and answers about questionnaire.

5. アンケート調査の結果と考察

5.1 数値による回答について

まず，図 4 に 0～3 の四段階で回答できる設問群とその回答について紹介する．なお 0 は全く当てはまらない，3 はすごく当てはまるを意味し，どうしても悩んでしまう場合等は無回答も可とした．図中の，4 色の積み上げグラフ（左軸）は全回答の内訳を表しており，青色の折れ線グラフ（右軸）が回答 0～3 をそれぞれ 0～3 点とした場合の平均値を表している．

設問 1.1～1.8 は参加者が普段の会話でどういう場合に困りごとがあるか，自分についての調査である．特に設問 1.1～1.4 は会話の人数についてで，設問 1.1「1 対 1 の会話で困ることがある」の回答は平均しておよそ 1.6 点であるのに対して，設問 1.2「3 人の会話で困ることがある」，設問 1.3「4 人～9 人の会話で困ることがある」の順で回答の平均値が上がっていることが確認でき，会話に参加している人数が多くなるほど困ることがある傾向にあることがわかった．設問 1.5～1.8 はコミュニケーション形態についてで，設問 1.5「ネット上の画像付きチャットで困ることがある」，1.6「ネット上のボイスチャット（電話含む）で困ることがある」，1.7「ネット上の文字チャットで困ることがある」，1.8「ネット上の文字によるコミュニケーション（メールなど）で困ることがある」では，回答の平均値はおよそ中心の 1.5 となっており，参加者全体での偏りはなく，困りごとがある人とない人に分かれた．アンケートの自由記述より，「文字や声だけでは Non-Verbal が読みにくい」，「文字は読み返せる」，「メールは自分のペースで返せる」，「メールはこまめな返信が負担になる」，「文字は行間を読み過ぎる」，「電子化された声は聞き取りにくいので目に見える文字のほうが良い」，「話すのが得意ではない」など，会話や文字に対する様々な特性を示す回答が寄せられた．このように今回の参加者グループは大勢での会話で困りごとを抱えているとしながらも，得意なコミュニケーションの形態が三者三様の集団であったといえる．

設問 2.1～2.5 は SNS の使い心地についてである．設問 2.1～2.4 はテンポの悪さや，混乱，もどかしさ，戸惑いに関する問いで，いずれも低い得点を示した．つまり使い心地は悪くないという意見が多く得られた．加えて，設問 2.5「何でも言える気がした」は中央値より高い得点を示し，多くの参加者の支持が得られた結果となった．しかし，一部の参加者からの不支持も見られるため，個人の特性などに応じた個別設定などの検討が必要である．

設問 3.1～3.5 は自分への影響についてである．ここでは，他人の発言を見て考えを巡らせた，SNS に参加する意欲が高まった，継続する価値を見出した等，ポジティブな問い

に対して高い評価が得られた一方で，設問 3.2「特別な発見があった」についての回答はちょうど半々に分かれるという評価に留まった．

設問 4.1～4.4 は SNS の利用を通じて感じた全体的な効果についてである．ここでは，発言を書き込むこと，発言を見ることが考えることに繋がった，他の人と場を共有していると感じたという問いには当てはまるという回答が比較的多く寄せられた一方で，具体的なアイデアが見つかるまでに至ったかどうかはどちらかといえば当てはまらないという評価が多かった．設問 3 と合わせて言えることは，アイデアの創出や特別な発見に対して本 SNS の影響があまりなかったという点である．これについては，即時的な効果は見込まれないものの，他方では自身が考えることへの影響があったという結果がみられることから，当事者研究の効き目はゆっくり表れるという当事者研究の基本的な考えと合致していると捉えることもできる．

設問 5.1～5.5 は本 SNS への関心についてである．ここでは，設問 5.1「この SNS に興味をもった」，5.2「この SNS の行く末が気になる」，5.3「完成したらすぐにでも利用してみたい」，5.4「すぐにでも利用してみたい」などの得点が総じて高く，本 SNS に対する大きな期待が伺えた．一方で，設問 5.3 に比べ設問 5.4 の得点のほうが低かったことから，改善の余地がまだあるという率直な意見として受け入れるべきであると捉えた．以下自由記述の回答の中でもそれに関する指摘がみられた．

5.2 自由記述の回答について

5.2.1 「言いっぱなし聞きっぱなし SNS」について

言いっぱなし聞きっぱなし SNS は，匿名で，表示場所がバラバラで，表示される時間にもバラつきがあることが特徴だが，次のようなコメントが得られたことから，本システムによって気軽に本音を発言できる手助けができる感触を確認できた：

- 「自分の意見のコメントがこっそりいただけるのは，ちょっと人の意見にドキドキする私にはありがたいと思います.」
- 「発言へのリプライや相手がどう思うかに恐怖を感じるので，こちらですと本音を自由に発言できそうでいいなと思いました.」
- 「対人恐怖もあるので，匿名性が高いのも安心して本音が言えそうだなと思いました.」

5.2.2 当事者研究会中の SNS の同時利用について

当事者研究会の間に SNS を同時に利用することに対して，いくつかの良い点と悪い点が指摘された．まず，「いつもマイクを一巡させるよりは情報量が多い」とコメントが得られたことを受けて，実際にどの程度情報が増えたのかを確認した．図 5 は，SNS 上の発言それぞれが当事者研究会中に口頭でされていた発言とどれだけ重複があったかどうかを調べたものである．SNS 上での全 173 個（当事者研究会 3 回分の合計）の発言のうち当事者研究会でされた発言と比べて内容的に被りのある発言（図中の重複あり）が 27 個 16%，新しい内容の発言が（新規）71 個 41%，その他が 75 個 43%あった．このことから，多くの新しい情報が SNS に投稿されていたことが確認できた．限られた時間の中でより多くの情報をやりとりできたことは有用性として評価できる．

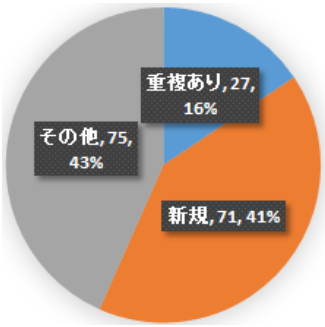

図 5 SNS と当事者研究会での発言内容の重複数
Figure 5 The counts of overlapping in statements of SNS between statements of meeting.

また，「同じ場所にいる人の，口には出さないつぶやき（きんちょう，体，思ったこと…）がみられると，共感できる.」というコメントにあるように，持ち時間内で言えなかったり，言うまでもなかったりといった，口に出さないつぶやきを共有できる場を提供できたことが確認できた．「3 分間話している時に，2 ふんぐらいで画面を見るとレスポンスがあり，こんなことも話していいのだ！！とホッとしました.」というコメントからは，SNS 上の直接的ではないコメントから安心感が与えられていた事例が確認できた．

しかしながら，「今回のやり方のほうが，やりやすいし，使いやすかった.」というコメントが得られた一方で，「SNS を見たり書きこんでいると，他の人の話ている内容が頭に入ってこなかったです.」等，似た内容の指摘を何人かの参加者から受けた．これに関しては，同時利用によって当事者研究会の妨害になってしまうのは本末転倒であるため，対処が必要である．例えば，個人設定により発言の表示時間の間隔を長くすることができることをしっかり周知することや，簡単な操作でその変更ができるようなシステム面での改善が考えられる．また，当事者研究会中に定期的に SNS での読み書きに集中する時間を設けるという進行方法の変更も考えられる．これについて簡単なテストを実施したところ，ゆとりができて他人の話を聞くことに集中しやすくなることが確かめられている．

6. おわりに

本研究では，悩みや苦労を抱える人々のコミュニティの実践として言いっぱなし聞きっぱなしのルールを採用して

行われる当事者研究会を取りあげ，その活動をオンラインで実施できる環境を構築するために，新しい発言提示方法を提案した．具体的には，既存のコミュニケーションシステムが生成する文脈を希薄にすることで人に流されずに発言ができる環境が提供できるという仮定の下，発言同士の関係を時間的・空間的な観点から曖昧にする発言提示方法を提案した．それを実装したプロトタイプシステムを用いて，試用実験をしたところ以下のような知見が得られた：

- 言いっぱなし聞きっぱなしのミーティングと並行して SNS 利用することで，限られた時間の中でより多くの情報を引き出すことができる
- ただし，同時利用は人によってミーティングの阻害になる
- 独特なインターフェースであるにもかかわらず，初めての利用でも使い心地は悪くない
- 参加者自身が考えることに影響を与えるが，即時的に新しい発見を導く効果はみられない
- 利用者は三者三様であるため，個別の設定等で対処する必要がある
- 感覚過敏当事者からの本 SNS への期待は高い

また今後の課題として，下記の点が挙げられる：

- 発言者，発言先，発言順序を曖昧にする提示方法が参加者やその発言に与える効果の検証
- SNS のみを用いた遠隔での当事者研究の実施・検証
- 得られたデータを有効に活用するフローの考案

謝辞

本研究は，文部科学省科研費（24119003）の助成を受けて行われた．

参考文献

1) 綾屋紗月，熊谷晋一郎：発達障害当事者研究: ゆっくりていねいにつながりたい，医学書院 (2008).
2) Necco 当事者研究会，http://necco-tk.com/
3) 石原孝二：当事者研究の研究，医学書院 (2013).
4) 浦河べてるの家：べてるの家の「非」援助論――そのままでいいと思えるための 25 章，医学書院 (2002).
5) 熊谷晋一郎，綾屋紗月：共同報告・生き延びるための研究，三田社会学，第 19 号，3-19 頁 (2014).
6) Node.js, http://nodejs.org/

ⓒ2015 Information Processing Society of Japan